

## 4. シンポジウムの開催

### 4-1. 開催概要

#### (1) 目的

経済産業省・厚生労働省では高齢者、障害者等が地域で安心して暮らせるよう、「ロボット介護機器開発5ヵ年計画」を策定し、介護ロボットの開発・普及策を進めている。本会では、この政策の動向を踏まえながら、来るべき在宅での介護ロボット導入を見据え、普及上の課題と福祉用具専門相談員が果たすべき役割を検討するため、調査研究事業に取り組んでいる。本シンポジウムは、この事業の一環として、アンケート結果（速報）や検討結果を中間的にアピールすると共に、テーマをより深めるため、シンポジウム参加者の意見を集約することを目的として開催した。

#### (2) 開催日時および会場

- ・開催日時：平成27年 2月24日（火）午後1時～5時10分
- ・会場：東京機械本社ビル（東京都港区芝5-26-24 6階会議室）

#### (3) プログラム内容

##### ■基調講演（30分）

講演者／東 祐二 氏

（厚生労働省老健局振興課 福祉用具・住宅改修指導官 介護支援専門官  
介護ロボット開発普及推進官）

テーマ／「介護保険制度における福祉用具・介護ロボットの動向について」

##### ■シンポジウム（90分）

テーマ「在宅における介護ロボット普及の課題と福祉用具専門相談員の役割」

- ・コーディネーター／伊藤利之氏（横浜市総合リハビリテーションセンター 顧問）
- ・シンポジスト／五島清国氏（公益財団法人テクノエイド協会 企画部 部長）  
瀬戸恒彦氏（公益社団法人かながわ福祉サービス振興会 理事長）  
原田重樹氏（一般社団法人日本介護支援専門員協会 副会長）  
渡邊慎一氏（一般社団法人神奈川県作業療法士会 会長）

- ・助言者／東祐二氏（前掲）

##### ■介護ロボット展示・プレゼンテーション

- ・アロン化成株式会社 ・大和ハウス工業株式会社

##### ■タイムスケジュール

13:00	受付開始	15:00～15:10	休憩（介護ロボット展示）
13:00～13:30	介護ロボット展示	15:10～16:40	シンポジウム
13:30～13:40	開会、趣旨説明	16:40～16:45	閉会
13:40～14:30	介護ロボットプレゼン	16:45～17:10	介護ロボット展示
14:30～15:00	基調講演		

#### 4-2. シンポジウム発言要旨

<p>発言（1）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 独居老人も増加するなか、モニターし、状況把握しながら介護サービスも提供していく必要がある。それができるのは、ローテクノロジーの福祉用具ではなく、ロボット。ロボット化が今後の課題。</li> <li>● ロボット機能を有するものは、誤作動、故障もありうる。けがや死亡事故にもつながりうる。エンドユーザーに適切につなげて、利活用してもらうためには、相当の準備が必要。臨床評価も必要。倫理問題も生じる。</li> <li>● どのように在宅に届けるか。どういう仕組みが有効か。そこで働く人たちは誰か、知識や技術はどのくらい必要かが今後の検討課題。</li> <li>● 福祉用具専門相談員がその中心にいることは間違いない。今後の役割、求められるレベルについて、検討が始まったところである。</li> <li>● 新しいテクノロジーは、多くの場合最初はプロが使う。コンピュータやインターネットなど、最初は研究者の中で広まった。それが一般に広がり、価格が安くなり、みんなが使えるようになって、普及していった。介護ロボットも、まずは<u>プロ、次にセミプロ、一般利用者へと広がる</u>。ただ、<u>認知症の人がそのテクノロジーを使えるか</u>という点、そう単純ではない。</li> <li>● 今から 10 年後の高齢者は、戦後の民主主義の中で育ってきた世代。自己主張が強い人も多く、また人数が多い。人数への対応とともに質、すなわち我々の専門性を上げていかない限り、満足は得られない。情報公開は非常に重要であり、その中で課題を共有すべき。それには、知識や技術が重要だが、これは一定の時間をかければ習得できる。それ以上に<u>コミュニケーション能力、責任能力のほか、臨床的なものも求められる</u>。即時に信頼関係を築けるような能力も大切。</li> </ul>
<p>発言（2）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <u>介護ロボットが普及推進されている状況は非常に喜ばしい</u>。はじめは利用率が 2～3 割程度だった福祉用具が今はおおよそ 5 割。すなわち、介護保険サービス利用者の半分は福祉用具を使っている。そのようななか、ロボットという概念も介護という概念も明確でない中で、いろいろな福祉用具が開発され、それをみんなが試そうとしているという状況というのは、前向きでよい。<u>いろいろな方が関与して、いろいろな方が、いろいろな立場で、フィードバックすれば、介護が変わってくる、高齢化社会が変わってくるのではないか</u>。</li> </ul>
<p>発言（3）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● テクノエイド協会では、経済産業省と厚生労働省の補助を受け、介護ロボットの普及に向けてさまざまな取り組みを実施している。在宅におけるロボットの普及に関しては、福祉用具専門相談員の役割に大きく期待している。</li> <li>● 2025 年には高齢者は人口の 3 割を超える。認知症高齢者、独居の高齢者、単独の高齢者世帯も増えていく。マンパワーの介護には限界がある。施設でも腰痛を抱える職員が多く、厚生労働省では昨年、19 年ぶりに腰痛予防対策指針を改定した。福祉用具を使った介護が求められてくる。</li> </ul>

- 高齢化は、日本だけでなく、アジア、ヨーロッパでも後を追うような形で進行している。日本がロボット技術を使った福祉機器の活用を先行して取り組むことによって、海外に展開できることから、経済産業省もこの分野に力を入れている。
- 国は、来年度より地域医療介護総合確保基金を創設して、施設に対してロボット技術を利用した導入を積極的に支援する取り組みを開始する予定である。その中で在宅の視点だけではなく、福祉用具専門相談員がどのような役割を果たしているか。
- 経済産業省と厚生労働省では、平成 25 年度からの「ロボット介護機器開発 5 ヵ年計画」を立て、重点分野の開発や標準化など、導入支援の取り組みを進めている。
- 経済産業省では今年度「ロボット介護推進プロジェクト」を実施している。開発支援だけではなく、一定程度開発を終えたものを、実際に現場に導入をしながら、業務の中でその効果を見極めていくという取り組み。このプロジェクトを通じて大きく 4 つの視点で効果測定をした。
- 1 つは介護を受ける側。ロボット導入により、本人に対してどのような効果があるか。一時的なものだけではなく、導入前、導入直後、1 カ月後、2 か月後と変化を見ていく。
- 2 点目は介護者に与える効果。一定期間使うことによって、腰痛の問題、他の業務時間の確保など、どのような効果があるか。今まで 2 人で行っていたことが 1 人でできるようになるなど、短期的、中期的、長期的な変化がある。
- 3 点目は、機械そのものの使い勝手。慣れてくることで、効果的な配置や作業・手順、操作方法等を見極めていく。
- 4 点目は、介護サービスの構成における効果。人の手による介護が、新しいものの導入により、職員の配置や業務の手法等、大きく変化していく。ひいては経済効果をももたらすのではないかという視点で評価する。
- 介護ロボットは、まだ「使えない」という意見が多くある一方で、うまく使いこなすことによって劇的に介護環境が変わった、という一部の意見もある。見守り支援により、生活の行動まで把握することができたなど、本来意図していないところでの効果も見られている。
- 今の開発支援は、施設での評価が中心。在宅への普及はもっと難しい。環境や自立度も異なり、認知症も軽度から重度までさまざま。介護ロボットの普及を考えると、メーカーと利用者だけでは済まない。福祉用具専門相談員の役割が必要。
- 障害者の支援機器は、メーカーと利用者の仲介者がいない。ロボットの普及にあたっては、仲介役になれる福祉用具専門相談員の役割は非常に大きい。
- 今後、福祉用具貸与事業者として、在宅、施設における役割を踏まえたビジネスモデルの検討も必要になる。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「ロボット革命実現会議」の報告書のエッセンスを見ると、介護は人の手で提供されるといった基本概念を維持しつつ、ロボット介護機器の活用による業務の効率化・省人力化に向けてのパラダイムシフトが描かれている。<u>本人の能力を生かしながら業務の効率化を図っていく、</u>ということが今後求められる。</li> <li>● 一方で、<u>人の手でしかなし得ないような質の高いサービスを集中的に提供することを推進すること</u>も示されている。<u>ロボットの導入は、人を減らすということではなく、人の手でしかできない部分は人でやっていく。</u>この提言では、<u>人間は質の高い介護のほうに注力し、進めていこう</u>ということを 2020 年に向けたあるべき姿として示している。</li> <li>● 以前内閣府の世論調査で、介護にロボットを利用したい／利用されたいか、ということに対して、約 60%が「どちらかという利用したい」も含めて肯定していた。この提言では、2020 年には 80%に上げるという数値目標がある。</li> <li>● <u>福祉用具専門相談員は、自分たちが欠かせない役割になるという視点で努力をしなければならない。</u>介護保険でのロボット利用も検討されているなか、<u>ロボット技術を在宅生活にうまく活用していくことが我々の使命・責務ではないか。</u></li> </ul>
<p>発言（４）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 在宅でロボットを上手に使うには、<u>テクノロジーとケアの両方がわかっている存在が必要。</u>効果的な使い方などを実際にアドバイスしないと、<u>介護ロボットの普及は困難。</u></li> <li>● 平成 25 年から、「さがみロボット産業特区」が、湘南エリア、藤沢、平塚、茅ヶ崎、そして厚木、海老名、相模原のほうに向かって作られている。研究開発も行われ、実際に介護施設、在宅でロボットを使ってみようという動きがある。</li> <li>● 5年前は、「介護ロボット」という言葉を使うこと自体、現場では抵抗があったが、平成 25 年に国の施策になってからは、「介護ロボット」という言葉が定着してきた。マスコミの影響もある。今では、<u>人材の確保、介護者の負担軽減、自立支援などという側面から注目されている。</u></li> <li>● <u>介護ロボット導入の阻害要因には、コストの問題のほか、有効に使える人がいない、あるいは運用技術が開発されていないことがある。</u></li> <li>● コミュニケーションロボットの「パロ（PARO）」を実際に特別養護老人ホームに導入し、成功した事例がある。「パロ、かわいいね」と、パロのまわりに認知症の方が自然と集まってきて、ケアの環境が変わっていった。ただ、この事例は、<u>スタッフ 1 人 1 人の時間にゆとりができた</u>という効果であり、認知症の方自身による影響を与えたかどうかは評価できていない。</li> <li>● パロが認知症の方自身による影響を与えた事例もある。言語聴覚士が介在し、Aさんに設定した課題の解決に向け、パロを有効に使う目的で導入した。アセスメントして、目標設定して、その目標に向かって適切にパロを動かしながら検証をしつつ、<u>問題行動、さまざまな障害等を解決していった</u>という事例である。</li> </ul>

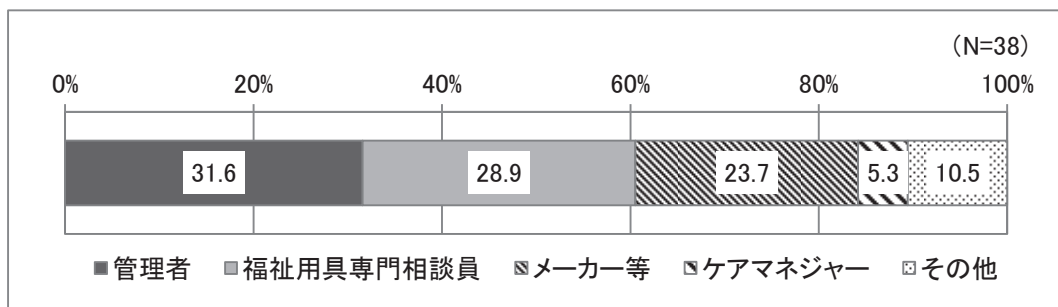
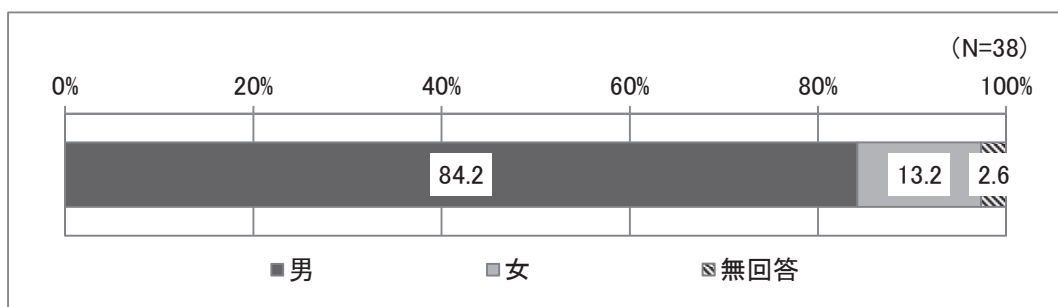
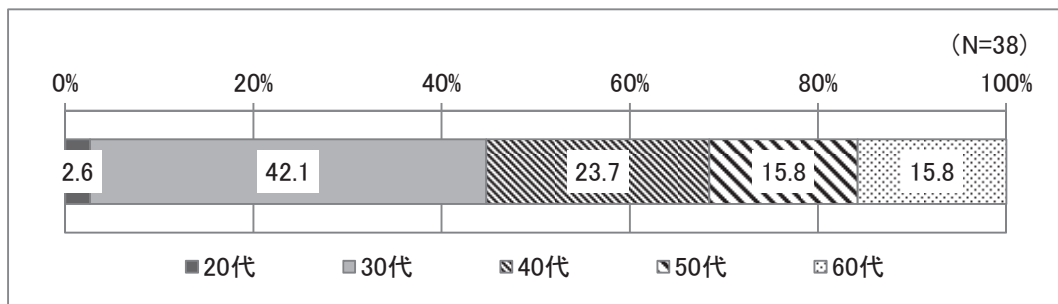
	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <u>一番のポイントは、現場で起きている課題を共有し、目標設定、PDCA のマネジメントサイクルを回すという考え方について、管理者と介護職員が共通認識をもつことが有効</u>ということである。そのためには、<u>PDCA をしっかりと回すという管理者の認識が重要。</u></li> <li>● 「<u>パルロ (PALRO)</u>」というコミュニケーション型ロボットは、評判が高く導入を希望する施設が多い。昨年 20 体、20 施設に導入。ただ、<u>WiFi (ワイファイ) の環境や、コンピュータの知識が必要になり、どこでも誰でも使えるというものではない。</u>若い介護者が iPad を使いながら、そのロボットを上手にコントロールすることもあった。ロボットの活用という中では、<u>使う側のスキルが重要</u>になる。</li> <li>● 今回の介護保険制度の改正の中で、福祉用具専門相談員の資質向上という観点から、指定講習会が 40 時間から 50 時間に変更になるとともに自己研鑽義務が課せられた。<u>福祉用具専門相談員のステップアップが求められている。</u></li> <li>● 福祉用具サービス計画と同様、介護ロボットについても、<u>PDCA のマネジメントサイクルに従ってサービス計画を作成し、導入、評価、改善するプロセスが必要。</u></li> <li>● 福祉用具専門相談員は、<u>地域包括ケアシステムのメンバーとして地域で活動し、ケアマネジャーとの連携もさらに強化していくことが期待されている。</u>介護ロボットの普及にも、一番近いところにいる。</li> <li>● <u>福祉用具の延長線上に介護ロボットがある。</u>これからは福祉用具にもコンピュータが組み込まれていく。それが介護ロボットという範疇になり、将来的には介護保険制度のもとで利用されることも想定される。遠い未来ではない。</li> <li>● 普及には、成功事例と失敗事例を公にすることが必要。こういう場面でこういう使い方をするとこういう効果が上がったという<u>事例のデータベースが作られ、必要な方が必要な時に情報を入手できる仕組み</u>ができればよい。</li> <li>● 現在、介護ロボットの専門家はいない。<u>情報や先端の知識を身につけて、専門家になることが重要。</u></li> </ul>
<p>発言 (5)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● <u>将来的には、ケアマネジャーもある程度の専門分化が必要。</u>介護系の資格を持ったケアマネジャーは多いが、医療的なことの支援や<u>介護ロボットを得意とするケアマネジャー</u>がこれから求められていくようになるのでは。</li> <li>● 介護ロボットという言葉の幅が広い。サービスをコーディネートするケアマネジャーの立場であれば、共通の基礎知識を持った上で関わらなければいけない。サービスをコーディネートするにあたって必要な一般的な知識は、ケアマネジャーも理解しておく必要があるが、<u>効果やリスクも含めた専門的な知識は、福祉用具専門相談員から提供してもらうのがケアマネジャーの立場。</u><u>ケアマネジャーと福祉用具専門相談員との連携が必要。</u></li> <li>● 医療との連携が重視されるなか、自立支援を含めて、その人の日常生活の支援をする視点でコーディネートをするのがケアマネジャーの仕事。<u>様々な専門職といかに</u></li> </ul>

	<p><u>チームワークを組んで、ともにアセスメントしてプランニングするか。チームアセスメントに基づいて、合意設定をした形でのプランニング。共通認識を持って、一緒に物事が考えられるようになっていけば、現状の課題を解消することが期待できる。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <u>ケアマネジャーも介護ロボットについての知識を高めていくとともに、福祉用具専門相談員と机を並べて学ぶ場が必要。</u></li> <li>● <u>将来的には、介護ロボットの上位資格、専門資格として、共通の協会、共通のカリキュラムで資格を認定するといったコンセプトも想定される。</u></li> <li>● <u>介護ロボットは、予測のつかない事故につながる恐れがある。その責任の所在を明確にしないと、ケアマネジャーとしてサービスを導入する際に、どういう介護ロボットを使えばいいのか想像がつかない。そういうところで専門職同士が関わっていきたい。介護ロボットに限らず、今の福祉用具も、十分に製品を理解した上で、導入を検討したい。福祉用具全般をいかに正しく効果的に使うのかを見直す機会になればよい。</u></li> </ul>
<p>発言（６）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 高齢社会・少子社会で人手不足といわれるが、介護ばかりに注力すると産業のバランスが悪くなる。海外からの人材についても簡単にはいかない。そこで、モノでカバーすることを考える。モノには２つある。１つは、環境としての大きな意味でのインフラである人。もう１つは、まさに今取り組んでいる福祉用具である。</li> <li>● フルサポート（介護全体の支援）なのかセミサポート（介護の一部分の支援）なのか。<u>セミサポートだけでも介護は随分変わる。将来的にフルサポートを期待しつつまずはセミサポートから。</u></li> <li>● どのようなところを介護するのか。国の重点分野では、生きていくうえで必要な活動の支援を重視しているが、実際には楽しむことや時間の充実を支援するのが出てきている。</li> <li>● <u>自立のサポートをするのか介護のサポートをするのかの観点もある。自立をサポートするのは難しいが、コアな部分の介護なのか、それとも周辺事項なのか。うまく効率化していくと自立度も上がっていくのではないか。</u></li> <li>● <u>介護ロボットに限らず使いこなす介護者がいないとなかなか普及しない。これは一方で、チームでしっかりやっていくことが重要。</u></li> </ul>

### 4-3. 参加者アンケート結果

#### (1) 参加者属性

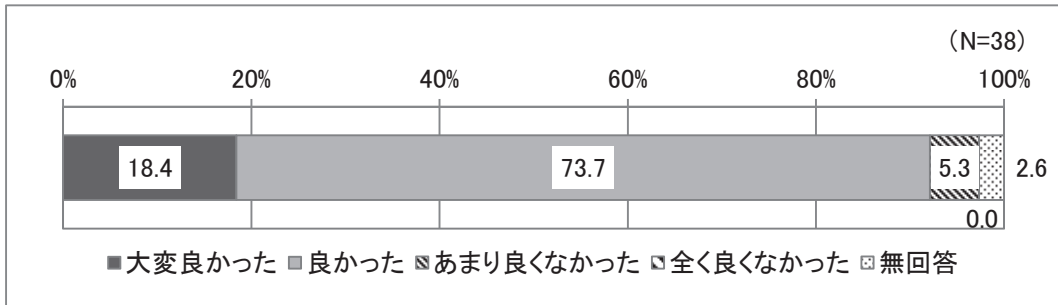
参加者の年齢、性別、立場は以下のとおりであった。



(2) 評価・感想

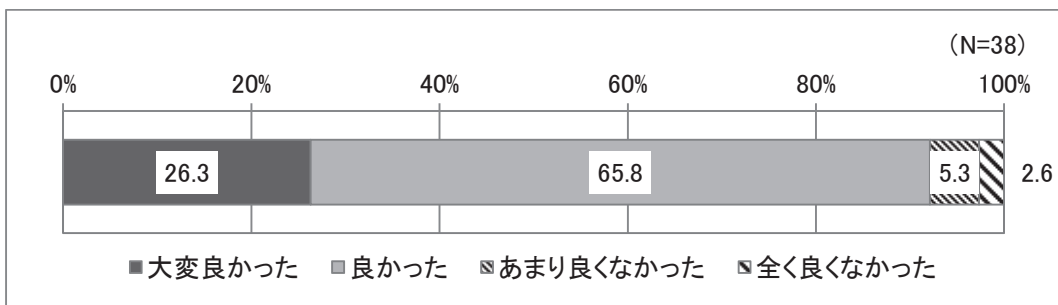
参加者による評価は以下のとおりであった。

【プレゼンテーション】



評価	理由・感想
大変良かった	<ul style="list-style-type: none"> <li>構造等を理解できた。</li> <li>内容、時間配分ともに十分。</li> </ul>
良かった	<ul style="list-style-type: none"> <li>開発段階のアロン化成の水洗ポータブルトイレの話が聞けてよかった。</li> <li>今後の製品開発に期待したい。</li> <li>実物があったのでわかりやすかった。</li> <li>初めてみる商品がいくつかあった。</li> <li>もっとくわしく知りたかったが、時間の関係で残念だった。</li> <li>もう少し展示する介護ロボットの種類を多くしてもらいたかった。</li> </ul>

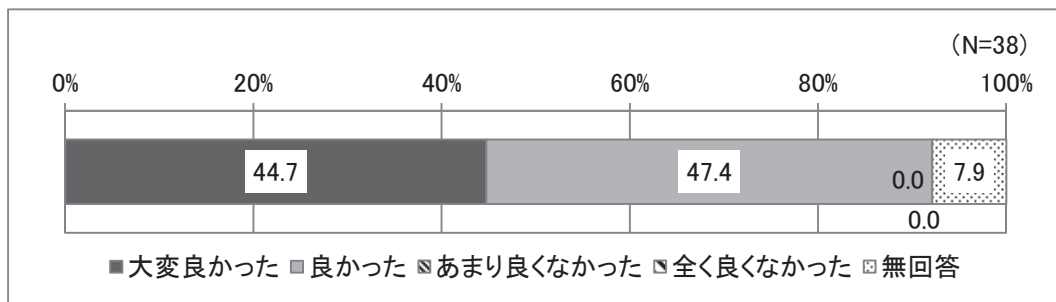
【基調講演】



評価	理由・感想
大変良かった	<ul style="list-style-type: none"> <li>「マッチング支援」の具体的な方針が知りたい。</li> <li>資料、後ほどじっくり読みます。</li> </ul>
良かった	<ul style="list-style-type: none"> <li>国の動向がわかり良かった。</li> <li>現在の状況がよく理解できた。</li> <li>難しかった。</li> <li>もっとくわしく知りたかったが、時間の関係で残念だった。</li> </ul>



【シンポジウム】



評価	理由・感想
大変良かった	<ul style="list-style-type: none"> <li>各分野からの意見を聞いたので大変参考になった。</li> <li>現状と課題を具体的に知ることができた。</li> <li>今後、介護ロボットが必要な時代になると考えていたが、今後のことを考える土台を学ぶことができた。</li> <li>福祉用具専門相談員がリスク、性能、効果等をよく理解しないと市場に受け入れられない。</li> <li>福祉用具専門相談員の役割や将来像がわかりやすく、どこを目指したものなのかがよくわかった。介護ロボットの専門資格ができれば取得したいと思った。</li> <li>今回ケアマネ協会の方がいたが、訪問介護の方の意見も聞きたい。</li> </ul>
良かった	<ul style="list-style-type: none"> <li>笑顔が増えれば自立度が上がる。介護者も利用者も笑顔が増えるような介護ロボットの効果を期待する。</li> <li>介護ロボットの普及には、これからいろいろクリアしていくことが多い先の長い話だが、方針、福祉用具専門相談員の役割の変化等わかった。</li> <li>独居の利用者の場合、故障や誤作動した場合の対応ができず、連絡することも難しいので、セコムのように 24 時間対応が必要になってくる。</li> <li>普段はなかなか耳に出来ない話で、参考になった。</li> <li>利用者がロボットを使用する時、福祉用具専門相談員の役割が重要と実感した。</li> <li>ロボット技術が普及したときの事故対応と予防、メンテナンス方法をどう考えていくのかが聞きたかった。評価方法（第三者評価の活用）なども今後の課題と感じた。</li> </ul>

### (3) 普及の課題

普及の課題の自由記述は以下のとおりであった。

立場	理由・感想
管理者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 多くの人に効果を与えられるロボットの開発。</li> <li>・ 使いやすさ。</li> <li>・ 利用しやすい、簡単。介助者が装着して介護するものは貸与に入るのか。</li> <li>・ 気軽さ。価格、ロボットそのものの取り扱い、ロボットの大きさ……。今のところすべてにおいて手軽だとは思えない。在宅では、ポータブルトイレの置き場確保のためにボランティアで家具移動等も手伝ってようやくポータブルトイレを納品するのが現状。</li> <li>・ 利用料、操作性、認知度等。</li> <li>・ 価格と給付対象品目の拡大。なかなか価格は下がらないと思うので、各自自治体へ働きかけをして、補助金（月額レンタルの補助）への促しをメーカーや業界団体で行ってほしい。</li> <li>・ 普及のための手数（指導）等への評価（価格）が見える形があれば普及しやすい。介護ロボットの具体的な形、効果等をまず広く知ってもらおう。</li> <li>・ 効果、成功事例、失敗事例が広く世界に知れ渡ること。</li> <li>・ 地域においての、介護ロボットの紹介や、研修会の開催など。</li> </ul>
福祉用具専門相談員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 簡単な操作。</li> <li>・ 有効性。認識を広げること。わかりやすく、操作しやすいこと。</li> <li>・ 理解いただける構造、使い方。使用時の効果の向上、装着を含めた使い勝手の良さ。値段。</li> <li>・ 価格に対する抵抗感が強い。利便性よりも価格を選ばれることが多いため価格を下げる。利用者負担額を軽くしないと試そうともされないと思う。</li> <li>・ コスト、場所（スペース）、メンテナンス。</li> <li>・ 特にヘルパーやケアマネジャーなどに認知されること。</li> <li>・ 保険適用か公的補助。</li> </ul>
メーカー等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 安心、安全、確実。</li> <li>・ 現場とメーカーの認識の一致。</li> <li>・ 価格：買いやすい価格が必要、住環境：ロボットを使用することを意識したスペースのある住居が必要。</li> <li>・ 金額、使用しやすさ、効果。</li> <li>・ 一般市民（介護者、家の方）に存在を知ってもらうこと。ケアプラン作成時に選択に入れてもらうことが重要。</li> <li>・ 大きな流れとして、課題がよく理解できました。モノを作る立場ですが、よりよいモノづくりのために「チーム」の中に入った取り組みをしたい。</li> <li>・ 現在の「介護ロボット」は、あまりに幅広くとらえすぎていて、課題も対応策もあいまいになっている。</li> </ul>
ケアマネジャー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 介護ロボットについて、理解が不足している。</li> <li>・ 値段（保険適用になる）。デモで使わせてもらえるとよい。</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 効果を検証するためのアウトカム、ロボット導入・提案のプロトコル[作業療法士]。</li> </ul>

立場	理由・感想
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• コストと安全性 [社会福祉法人の運営企画]。</li> <li>• 介護現場に導入する人材(介護福祉士、福祉用具専門相談員など)の養成[大学関係者]。</li> <li>• 値段と安全性、使用方法を説明するためのマニュアルと標準化。誰が使うのか(利用者ではなく介護者)で説明方法に高度な理解力が求められる [福祉福祉用具専門相談員研修養成講師]。</li> </ul>

#### (4) 福祉用具専門相談員の役割

福祉用具専門相談員の役割の自由記述は以下のとおりであった。

立場	理由・感想
管理者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本人の自立支援と介護者の介護支援。</li> <li>・ 介護ロボットについての専門的知識と導入方法。</li> <li>・ 介護ロボットを利用するための知識・技術を十分に身につけて、ケアマネジャーや利用者にきちんと伝えられるようにする。</li> <li>・ 福祉用具専門相談員がデモする際の技術。</li> <li>・ ユニバーサル化して、多く使ってもらえるように情報収集と発信したい。</li> <li>・ 福祉用具専門相談員がスペシャリストになる必要がある。ロボット研修時間の拡大・国家資格化が必要だと思う。</li> <li>・ 福祉用具専門相談員が知識を身につけるような、本日の研修等を多く開催してほしい。介護ロボット知識向上のための資格を設けてほしい。</li> </ul>
福祉用具専門相談員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 介護ロボットに対して、幅広い知識を得ること。</li> <li>・ 介護ロボットの認知とマッチングの判断ができること。</li> <li>・ そもそも利用者の状況に合った選定ができるようにならないといけない。理学療法士・作業療法士に近いレベルの研修をしてないと、高いロボットを導入しても使えないという状況ができてしまう。</li> <li>・ ケアマネジャー、ご家族に対して、適する商品の説明。</li> <li>・ ロボットの役割、機能をきちんと説明できる。</li> <li>・ PR活動。</li> <li>・ ケアマネジャー、利用者との連携。</li> <li>・ 専門知識をもった橋渡し役。</li> </ul>
メーカー等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 機器の理解をし、適切に使えること。</li> <li>・ やわらかい頭。</li> <li>・ 安全な使用を指導し、人に負担をかけない福祉用具の普及か。</li> <li>・ 介護ロボットの研修会への参加。</li> <li>・ 利用する人のこと、介護する人のことがよくわかった福祉用具の開発者になりたい。もちろん最もプロの福祉用具専門相談員でもありたい。</li> <li>・ ケアマネジャー等との連携。</li> </ul>
ケアマネジャー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高齢者社会においては、必ず必要な役割。</li> <li>・ 専門的な知識と連携。</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 福祉用具（ロボット）を介した在宅における専門職との連携促進〔作業療法士〕。</li> <li>・ エビデンスの提示／使い方の指導など〔大学関係者〕。</li> <li>・ 福祉用具専門相談員に求められる能力が高くなっていくので研修（養成）時間は60～70時間位で現場にての実務経験は2年以上、要は介護福祉士（国家資格）に準ずる能力が必要〔福祉用具専門相談員研修養成講師〕。</li> </ul>